



形容動詞・名詞述語と共起するコピュラの活用について

岸本，秀樹

(Citation)

神戸言語学論叢, 13:1-15

(Issue Date)

2022-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013089>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013089>



形容動詞・名詞述語と共起するコピュラの活用について

岸本 秀樹

神戸大学

1. はじめに

品詞 (Parts of speech) は、単純に言えば、語の分類のことを指すが、アプローチや考え方によってどのような品詞が設定されるかが異なる。日本語の品詞に関しても、見方により品詞の種類が異なることがある。伝統的な国語学では、動詞・形容詞・形容動詞を含む「用言」とその他の自立語の品詞は活用するかどうかによって区別される。国文法で品詞分類に相当するものは、生成文法の語彙範疇 (lexical categories) の分類に相当する。Chomsky (1970) では、名詞 (N)、動詞 (V)、形容詞 (A)、前置詞 (P) が、[+N] または [-N] という素性を持つかどうか、[+V] または [-V] という素性を持つかどうかで区別される。¹ 文中での機能という点では、形容詞と形容動詞は同じなので、この2つは同じクラスに入ると考えられることが多い。

形容動詞については、名詞との関係についても議論がある。形容動詞の活用語尾については、名詞と結合するコピュラとの類似性があることはよく知られている。そのため、形容動詞の活用部分は、コピュラであるとする見方 (時枝1950) と、活用語尾と考える見方 (橋本1948) がある。形容動詞と名詞+コピュラの形式上の違いは、名詞修飾をする場合に現れる。

- (1) a. この本はきれいだ > きれいな本
b. 学生服は泥々だ > 泥々の学生服

形容動詞を独立の範疇と見るかについても意見が分かれる。Kageyama (1982) やMiyagawa (1987) のように、[+A] [-A] のような素性を導入して形容詞と形容動詞を区別しようとする試みがある。しかし、名詞と形容動詞は連続体をなすとする見方 (Uehara 1998) もある。さらに、(1) のような名詞修飾形によっては形容詞と形容動詞を区別できないとする立場 (村木2012) や区別できるとする立場 (Urushibara 1993) がある。

本論では、形容動詞が日本語において独立の品詞あるいは語彙範疇とみなすべきかどうかという点に関しては深入りせず、形容動詞の活用語尾はコピュラであり、名詞と形容動詞の名詞修飾形の形態の違いは、名詞には属格の助詞が現れ、形容動詞にはコピュラの名詞修飾形が現れることに由来することを論じる。² 特に、形容詞の名詞修飾形の「な」はコピュラで、形容動詞の語幹に付くと活用語尾のように振る舞うが、名詞述語に付く「の」は (属

格・補文標識・名詞化の機能を担う可能性のある) 助詞であり、コピュラの活用形ではないことを論じる。名詞述語に現れる「の」は、名詞が連続する際に挿入される「の」で、この環境では、「な-の」の連続体ができるが、表面的には、コピュラが削除されて「名詞の＋名詞」の形式が派生されることを示す。

2. 形容動詞述語と名詞述語の連体形

現代日本語の形容動詞の活用の特徴としては、動詞や形容動詞では失われてしまった終止形と連用形の形態的な区別が残っていることである。したがって、形容動詞と動詞・形容詞では、名詞修飾の形態について、(2) のような違いが観察される。

- (2) a. 学生が静かだ > 学生が静かな可能性
- b. 学生がおとなしい > 学生がおとなしい可能性
- c. 学生が英語を話す > 学生が英語を話す可能性

(2a) の形容動詞「静か」では、終止形が「静かだ」で、名詞が後続すると、連体形の「静かな」となる。(2b) と (2c) で示されているように、形容詞や動詞については、名詞が後続しても、形態は変化しない。同様のことは、関係節化においても観察される。

- (3) a. 学生が静かだ > 静かな学生
- b. 学生がおとなしい > おとなしい学生
- c. 学生が英語を話す > 英語を話す学生

伝統的な文法では、動詞や形容詞に終止形と連体形の活用は設定されているが、これは古い日本語の動詞や形容詞にこの区別があったからである。しかし、現代日本語の動詞や形容詞では、連体形が終止形のスロットに進出したために、終止形と連体形の形態的な区別はなくなっている (信太1970, 1976)。

形容動詞の形態は、名詞が述語として機能する場合に現れるコピュラの「だ」の形態と関係していることが知られている。形容動詞に終止形と連体形の区別が残っているのは、コピュラが文末に現れる形と名詞に接続する形が異なるためであると考えられる。しかしながら、名詞修飾の形は、(4) で示されているように、形容動詞と名詞で異なる。

- (4) a. 静かな学生
- b. 学生の本

(4a) の「静か」は形容動詞なので、「静か」の後には「な」が現れる。(4b) の「学生」の後には「の」が現れる。(4b) の「本」の前に現れる「学生」は、名詞であって、名詞述語ではないために、コピュラではなく、名詞の埋め込みを示す (属格の) 「の」であるとして問題がないであろう。

名詞述語の場合でも活用の事情は基本的に同じである。名詞述語文は、「名詞句ガ+名詞句ダ」の形式を持つが、名詞述語と主語名詞句の意味関係からいくつかの種類に分けられる (Higgins 1979, Declark 1988, 西山2003など)。ここで取り上げるのは、叙述文と指定文と呼ばれるタイプの名詞述語文である。³

- (5) a. あの人は変わり者だ。 (叙述文)
- b. あの学生が主犯だ。 (指定文)
- c. 主犯はあの学生だ。 (倒置指定文)

叙述文の名詞述語は、形容詞・形容動詞述語文と同じように、主語の属性を叙述する。指定文では、名詞述語の意味に変項部分があり、その変項の値を主語が決めている。叙述文では倒置ができないが、指定文では倒置が可能である。

(5) の名詞述語文では、(6) で示されているように、名詞修飾形を作ることができる。

- (6) a. あの人が変わり者{の/である}可能性
- b. 学生が主犯{の/である}可能性
- c. 主犯が学生{の/である}可能性

名詞述語の名詞修飾形は、「の」も「である」も可能である (益岡・田窪 1992)。これに対して、純粋な名詞の名詞修飾形には「の」しか現れない。したがって、名詞が名詞修飾をする場合、修飾形式に (7) のような文法性の対立が生じる。

- (7) 学生{の/*である}本

(7) の「学生」は、名詞句「本」中に含まれているので、「の」が後続する助詞として現れる。しかし、「本」は名詞述語とは解釈できないため、「の」を「である」に変えることはできない。なお、関係節化によって、名詞述語の名詞修飾の形式を作ることできるが、(8) からわかるように、倒置指定文からは関係節による名詞修飾の形式は派生できない。

- (8) a. 変わり者{の/である}あの人
- b. 主犯{の/である}学生
- c. *学生{の/である}主犯

倒置指定文からは名詞修飾の形式は派生できないので、関係節化で問題となる名詞述語文は、叙述文と（倒置が起こっていない）指定文の2つとなる。関係節の派生が可能な場合、名詞述語の名詞修飾形は「の」であり、形容動詞の名詞修飾形の「な」とは異なる。つまり、「静か」のような形容動詞が名詞を修飾する場合は、(4a) のように、ナ形になるが、ノ形にはならない。名詞述語が名詞を修飾している場合には、(6) および (8) で示されているように、ノ形になりナ形にはならないのである。そのため、「の」はコピュラの活用形の1つであると考えられることが多い（奥津1978, Hasegawa 2015）。

「の」の前に現れる要素が名詞述語である場合 (9a) のような変換が可能であるのと同様に、形容動詞も (9b) のように同じ変換が可能である。

- (9) a. 変わり者{の/である}学生
b. 静か{な/である}学生

名詞述語が名詞を修飾してノ形になるのは、名詞が連続して現れる際に、名詞が「の」でつながれる場合と同じである。

それでは、(6) の名詞述語に現れる「の」と (7) の名詞の埋め込みを示す「の」がなぜ同じ形なのであろうか。これは偶然ではなく、この2つの「の」は、実は名詞句の中にさらに名詞句が埋め込まれた際に起こる属格の「の」であることを次節において論じる。

3. 形容動詞と名詞述語に現れるコピュラの特徴

本節では、形容動詞に含まれる「だ」は、名詞述語に含まれるコピュラの「だ」と同じ統語的な特徴を持っていることを示す。前節でも見たように、名詞はそれ自体活用しないが、名詞述語においては、中に含まれるコピュラが活用する。また、形容動詞のコピュラ部分も活用する。しかし、前節でも見たように、形容動詞と名詞述語が連体形になった場合には、(10a) のような形式の違いが現れる。

- (10) a. 変わり者{の/*な}学生
b. 静か{な/*の}学生

(10a) の名詞修飾形の「変わり者の」は、名詞述語「変わり者だ」という名詞述語が右側の名詞を修飾する際に用いられる。形容動詞と名詞述語に現れるコピュラの統語的な特徴は同じである。例えば、(11) のように、コピュラが過去形の「だった」や「である」の場合には後に名詞が続くことができるが、「だ」の形式は後に名詞が後続すると非文法的になる。

- (11) a. 潔癖症{*だ/だった/である}学生
b. 静か{*だ/だった/である}学生

後に名詞が続く場合の形容動詞と名詞述語の活用のパターンを見ると、「な」は形容動詞に後続する場合のコピュラの活用で、名詞に後続する場合にはコピュラが「の」の形になると考えられるが、「な」は「の」の後に続く場合もあるので、単純に「の」がコピュラの活用形であるとはみなせない。

- (12) a. [あの人が{学生/穏やか}なの]はそういう理由からです。
b. あの人は{学生/穏やか}なの？

(12a) の「の」は、疑似分裂文前提節の述語部分の後ろに現れ、名詞化する助詞として機能し、(12b)は疑問文で疑問を表す助詞として機能している。いずれの場合も、「の」の前に現れるのは「な」である。この場合、形容動詞と同様に名詞も「な」を伴うことになる。また、同様の「な」は「ので」「のに」などの接続助詞の前においても現れる。

- (13) a. 彼は{学生/穏やか}なので....
b. 彼は{学生/穏やか}なのに....

形態的に見ると、形容動詞と名詞述語は、(12) と (13) の環境ではまったく同じ形態 (形式) で現れる。「ので」や「のに」の「の」はもともと名詞化の機能を持つ助詞であったものが、「で」や「に」と一体化し接続助詞として文法化したと考えられる。また、「だから」や「だろう」の場合には、(14) で示されているように、「なの」が随意的に現れることができる。

- (14) a. 彼は{学生/穏やか}(なの)だから....
b. 彼は{学生/穏やか}(なの)だろう。

「の」はもともと名詞を繋ぐ機能や名詞化を担う機能を持っている助詞である。そのため、前接する述語要素には、連体形が要求される。(12) から (14) の環境では、「学生」や「穏やか」の後に現れるコピュラは後続する「の」の名詞性によって活用して「な」となっていると考えられる。「だろう」の前には、述語要素だけでなく、名詞も生起可能なので、この場合「の」は省略可能である。「の」が省略されると「な」は現れなくなり、「だから」や「だろう」に直接接続することになる。⁴

(12) から (14) の「の」および「の」が組み合わされて作られた要素は、先行する要素が形容動詞や名詞の場合には、連体形が要求される。連体形は、もともと名詞を修飾する場合に用いられる活用形である。しかし、文法化によって名詞の性質を失った要素も前接する要

素に連体形の要請を課すものがある。(12) から (14) の「の」は、そのような要素であり、本来のコピュラの活用形であるナ形が現れるのである。そのため、名詞述語に現れる名詞修飾「の」を単純にコピュラの連体形の一形態とみなすのには問題が残る。

なお、先行する要素に連体形を要求する要素が名詞としての性質を持っているかどうかについては、名詞修飾にのみ使用される連体詞を用いることで確認できる。例えば、形容詞的な意味を表す「大きな」「小さな」「細かな」「おかしな」は、名詞修飾にしか用いられず、名詞修飾以外の環境で使用しようとすると、同じ意味を持つ形容詞の「大きい」「小さい」「細かい」「おかしい」で代用しなければならない。

- (15) a. おかしな話 -> その話はおかしい
b. 細かな細工 -> その細工は細かい

連体詞が活用に依拠して認可を受けるならば、連体形の現れる環境で現れてもよいと予測されるが、実際には連体形が現れるすべての環境で現れるわけではない。まず、分裂文の前提節の述語の位置および文に疑問を表す「の」が後続し述語が形容動詞である場合は、(16) で示されているように、形容動詞の連体形が現れるが、連体詞は現れることができない。

- (16) a. [その話が{*おかしな/おかしい}の]はそういう理由からです。
b. その話は{*おかしな/おかしい}の？

(16a) では、前置詞句が焦点位置に現れているタイプの分裂文を用いている。ちなみに、焦点位置に名詞句が現れる (17) は、一見すると分裂文のように見えるが、「おかしな」は生起が可能である。

- (17) [おかしな/おかしい]のはその話です。

(17) において「おかしな」が生起できるのは、(17) に対しては、分裂文ではない解釈が可能であるからである。つまり、「その話です」の部分は、分裂文の焦点でもありうるが、名詞述語とも解釈できるのである。(17) の「の」は、補文標識の「の」ではなく、名詞化の機能を持った助詞と認定することができるために、(17) では連体詞の生起が許されるのである。

(16) と (17) の文のタイプの違いは、(18) で示されているように、いわゆる「が/の」交替の可能性からも検証できる。

- (18) a. あの人{が/の}話したのは、その噂です。
b. あの人{が/*の}話したのは、そういう理由からです。

(18a) の「その噂」は名詞述語として機能する可能性があるので、「が/の」交替が許容される。しかし、「そういう理由から」が焦点部に現れる (18b) の疑似分裂文では、焦点部にある要素が名詞述語として機能する可能性は排除される。したがって、この場合には、「が/の」交替は可能ではない。

次に、「ので」や「のに」も、前接要素には連体形が要求される。したがって、(19) のような分布が観察される。

- (19) a. その話は{不可解な/*おかしな/おかしい}ので....
b. その話は{不可解な/*おかしな/おかしい}のに....

通常形容動詞は、「ので」や「のに」の前では、ナ形で現れる。しかし、同じナ形をとっていても、連体詞の「おかしな」は「ので」「のに」の前に生起させることができない。(連体形と終止形の区別がない) 形容詞の「おかしい」であれば容認される。この事実、(19) の「の」が語彙的な名詞としての性質を持っていないということを意味する。

日本語には、名詞修飾をしていても「な」が現れない形容動詞「同じ」がある。「同じ」の形態を見ることによっても統語環境の違いが検証できる。まず、「同じ」は、終止形ではコピュラを伴うが、名詞修飾をして連体形になるとナ形にならず、語幹のみが現れるという特徴を示す。

- (20) a. それはまったく同じだ。
b. {同じ/*同じな}本

「同じ」が文末に現れた場合にはコピュラを伴うが、(20b) のように名詞修飾の形になると、コピュラが削除され語幹だけが現れると考えられる。「同じ」にはもともとコピュラが伴っているということは、以下の例にコピュラが現れることからわかる。

- (21) a. [それが{同じな/*同じ}の]はこういう理由からです。
b. それは{同じな/*同じ}の？

(21) は補文標識や疑問を表す「の」の例であるが、前に現れる「同じ」には「な」が伴わなくてはならない。(22) は接続助詞の例である。

- (22) a. それは{同じな/*同じ}ので.....
b. それは{同じな/*同じ}のに.....

接続助詞「ので」「のに」の前に「同じ」が現れた場合も、「同じ」の後に「な」が生起しなければならない。名詞が後続する「同じ」の場合、コピュラが削除されるのであれば、文法化によって、接続助詞の一部になった「ので」「のに」や、補文標識の「の」や疑問を表す「の」は、前接する述語要素に連体形を要求するものの、それ自体は名詞としての性質を保持していないことになる。

ちなみに、名詞述語文が埋め込まれると、ガ格主語が現れることができるので、TP の投射を持っていると考えられる。

- (23) a. 彼が子供に親切**な**理由
b. 彼が犯人の**可能性**

埋め込まれた要素は、名詞句であっても名詞節であっても同じ形式で現れる。そのため、コピュラは、活用は埋め込みの構造とは関係なく隣接関係によって活用すると考えられる。

要するに、名詞でない要素が前節要素に連体形を要求する場合、形容動詞と名詞はコピュラの「な」を伴う。しかし、連体形を要求する要素に名詞の特性があると、形容動詞ではナ形で現れるコピュラが維持されるが、名詞の場合にはコピュラの脱落が起こり、代わりに「の」が現れるということである。この現象は、記述的には、(24) のように規定できる。

- (24) a. [XP [形容動詞 +な] + X [__+Attr]
b. [XP [名詞句+な] + X [__+Attr] <-N>]
c. [XP [名詞句] +の+ X [__+Attr] <+N>]

(24) において、[__+Attr] は、前部要素に連体形の要素を要求することを指定し、<+N> で指定されるXは、名詞としての性質を持っており、<-N>で指定されるXは名詞の性質を持っていないことを示している。形容動詞では、連体形が要求される環境では、(23a) のように、ナ形のみが可能な形である。同様に、(24b) のように、前接要素が名詞でXが[__+Attr] <-N>の場合、コピュラはナ形で現れる。しかし、(24c) のように、Xが[__+Attr] <+N> の場合には、助詞の「の」が生起するのである。(不規則な活用をする「同じ」については後述する。)

具体的にどのように連体修飾の形式が派生されるかを見ると、まず、形容動詞の場合には、単純にコピュラがナ形をとって埋め込まれる。⁵

- (25) a. 彼が人に親切**な**可能性
b. [彼が人に親切[(COP+T=>)な]]
↓
[NP [] 可能性]

次に、「の」が現れる場合であるが、こちらは、2つのケースが考えられる。前接要素に単純な名詞句が現れる場合と名詞述語が現れる場合である。

(26) a. 学生の集まり

b. [学生]



[NP [] の集まり]

(26a) の「学生」は活用をしない名詞句なので、そのまま名詞への埋め込みが起こる。この場合、名詞と名詞の連鎖が起こるので、助詞の「の」が間に現れることになる。

次に、(27a) の「変わり者の学生」のコピュラは、(27b) のように、省略された上で「名詞+の+名詞」のフレームに埋め込まれていると考えられる。

(27) a. 変わり者の学生

b. [変わり者[(COP+T=>)φ]]



[NP [] の学生]

(27a) のように、埋め込まれている要素が名詞述語で、かつ、後に続く X が名詞の性質を持つ場合、「な」の脱落が起こる。つまり、名詞の中に名詞句が埋め込まれた場合には、「の」のフレームが優先され、名詞接続をすることができる連体形のコピュラは削除されるのである。この分析では、「の」はコピュラの活用形ではなく、属格の助詞であるということになる。

上の規則は、名詞としての性質を失った要素が、前節要素に連体形を要求する場合には適用されない。(28) は、「のに」や「ので」に名詞述語が埋め込まれた場合の派生である。

(28) a. 変わり者な{ので/のに}

b. [変わり者[(COP+T=>)な]]



[NP [] ので/のに....]

「のに」や「ので」は、助詞の「の」が文法化によって接続助詞の一部になっている。この「の」はもともと前に来る要素に連体形を要求する要素で、接続助詞になってもその性質は維持されている。この場合には、名詞の後ろに現れるナ形のコピュラはそのまま残ることになる。

「同じ」の場合には、「静か」「穏やか」などの形容動詞とは異なり、ナ形のコピュラは、[+N] の要素の前に現れると削除されるが、[-N] であると削除は起こらない。「同じ」は形容動詞であるのにもかかわらず、名詞におけるコピュラ削除の規則が適用されることになる。したがって、「同じ」が名詞を修飾する場合には、(29) のような埋め込みが起こる。

- (29) a. 同じ学生
 b. [同じ[[COP+T=>)φ]]
 ↓
 [NP []学生]

「同じ」では「名詞+の+名詞」のフレームへの埋め込みは起こらない。しかし、「同じ」に伴うコピュラは削除されるため、「同じ」は語幹だけが具現化することになる。ただし、「同じ」に後続する要素が単に連体形を要求するだけで、名詞として性質を持っていないければ、(30) のような埋め込みが起こる。

- (30) a. 同じな{の/のに}
 b. [同じ[[COP+T=>)な]]
 ↓
 [NP [] の/のに....]

(30a) の場合は、通常形容動詞の埋め込みの規則が適用されている。この場合、コピュラを脱落させて「*同じ{の/のに}...」にすると、非文法的になる。「同じ」は、名詞に埋め込まれた時にのみ、例外的に語幹だけで現れ、名詞修飾の要求を満たすという特殊な振る舞いを示すのである。

以上をまとめると、日本語には、名詞句が名詞句の中に埋め込まれた際には、そのつながりを属格で標示するという規則がある。この規則がコピュラを伴う名詞述語に適用された場合には、コピュラを脱落させることになる。この際、埋め込みのホストとなる要素は、名詞としての性質を持っていることが必要である。文法化した名詞要素は名詞の性質を維持していないので、前節要素に連体形を要求する場合には、コピュラの脱落は起こらずナ形のコピュラが現れる。

4. 二種類のコピュラ

本節では、名詞述語文に現れる二種類のコピュラについて検討する。ここで見る二種類のコピュラとは、属性を表す名詞述語に現れるコピュラと、文末が名詞で終わる場合にデフォルトとして挿入されるコピュラである。属性を表す名詞述語に現れるコピュラは、名詞を述

語に変換する機能を持っているため、デフォルトで挿入されるコピュラとは異なる性質を持っていることを示す。

まず、第2節で見た名詞述語文の叙述文と指定文について再度検討することにする。叙述文ではコピュラと共起する名詞句が述語として機能する。指定文では、コピュラと共起する名詞句が変項を含む名詞句で述語として機能する。指定文の場合には、名詞句の倒置が許される。したがって、(31) の3タイプの名詞述語文が成立する。

- (31) a. あの人は変わり者だ。 (叙述文)
b. あの学生が主犯だ。 (指定文)
c. 主犯はあの学生だ。 (倒置指定文)

ここで、これらの名詞述語文に「だけ」を付加してみる。(31a) の叙述文からは、(32) のような分布が観察される。

- (32) a. あの人は変わり者なだけだ。
b. *あの人は変わり者のだけだ。
c. *あの人は変わり者だけだ。

(32a) の叙述文においては、「だけ」が付加されると「だけ」の前にナ形のコピュラが現れ、「だけ」の後ろには、文末のコピュラ「だ」が現れている。「だけ」の前に「の」が現れる(32b) と、「だけ」前に「な」も「の」も現れない(32c) は非文法的である。次に、(31b) の指定文に「だけ」を付加した場合には、(33) のような分布が観察される。

- (33) a. *あの学生は主犯なだけだ。
b. *あの学生は主犯のだけだ。
c. *あの学生は主犯だけだ。

(33) の指定文においては、「だけ」を「主犯」に付加することができない。これは、指定文に現れる名詞述語の性質によると考えられる。指定文の名詞述語は、西山(2003)が議論するように、変項を含むため、述語の意味が「だけ」の意味とは整合しないためと考えられる。しかし、(31c) の倒置指定文では、「だけ」を文末に付加することが可能である。

- (34) a. 主犯はあの学生だけだ。
b. *主犯はあの学生なだけだ。
c. *主犯はあの学生のだけだ。

倒置指定文の述語位置に現れる名詞句は、項として機能している。したがって、倒置指定文に現れる文末のコピュラは、名詞を名詞述語に変換するコピュラではなく、デフォルトのコピュラである。

「だけ」の後ろに現れる文末のコピュラは、名詞要素が後続すると「の」に置き換わる。このことは、「だけ」が名詞化を起し名詞として認定されるため、「だけ」の後に起こるコピュラを「の」に置き換える条件が満たされることを示唆している。実際に、文中で「だけ」句全体が名詞として機能することは、それらの要素が格助詞とともに現れて項として機能できることから確認できる。

- (35) a. 彼女は[かわいいだけ/穏やかなだけ]が取り柄だ。
b. 私は[そこに行くだけ]で満足だ。

ここで注目すべき点は、(32) の名詞述語の「変わり者」が名詞と考えられるのにもかかわらず、「だけ」に接続する場合、「の」が続くことができず、ナ形のコピュラが現れるということである。これは、名詞が属性を表すと、形容動詞と同じようにコピュラが組み合わせられるということで、名詞接続時に現れるナ形のコピュラは、形容動詞専用の形ではないことを示している。

「温和」が形容動詞述語となる文でも、文末に「だけ」を付加することができる。この場合、「温和」の後だけでなく「だけ」の後にもコピュラが現れる。(36a) で示されているように、1つめのコピュラはナ形をとり、2つめは終止形をとる。

- (36) a. この人は温和なだけだ。
b. 堅実なだけ{*な/の}人
c. この人は堅実なだけ{な/*の}ので...

(36a) のコピュラ文から名詞修飾節を作ると、(36b) で示されているように、名詞の前には「の」が現れる。しかし、名詞の代わりに「ので」が後続すると、(36c) のように、「の」ではなく「な」が現れる。

同様に、動詞文や形容詞文の文末に「だけ」を置くと、述語で終わらないために、コピュラの「だ」が現れる。このコピュラもまた、名詞が後続するか「ので」が後続するかで形が変わり、(36) のコピュラと同じ分布を示す。

- (37) a. あの子はかわいいだけだ。
b. かわいいだけ{*な/の}あの子
c. あの子はかわいいだけ{な/*の}ので...

(37a) では「かわいい」の外側に「だけ」が現れている。この文が名詞修飾をすると、(37b) で示されているように、名詞の前には「の」が現れる。(37a) の後ろに連体形を要求する「の」が来ると、(37c) のように、「だけ」の後ろには「な」が現れる。動詞文も同様である。

- (38) a. あの学生が少し働いただけだ。
 b. 少し働いただけ {*な/の} あの学生
 c. 少し働いただけ {な/*の} ので...

動詞文や形容詞文の文末に「だけ」を置くと、文が活用する述語で終わらないために、コンピュータの「だ」が現れる。このコンピュータは、デフォルトのコンピュータであり、名詞修飾をする環境や「ので」が後続する環境において現れる。文末に「だけ」が置かれた場合に「だけ」の後ろに現れるコンピュータは常にデフォルトのコンピュータである。

次に、名詞述語と名詞が後続した場合の形式について考えてみると、(39a) の「変わり者」に「だけ」を付加した上で、主語を関係節の主要部にすると、(39b) の形式ができる。「ので」が後続した場合には、(39c) の形式ができる。

- (39) a. あの学生は変わり者だ。
 b. 変わり者なだけのあの学生
 c. あの学生は変わり者なだけなので...

これに対して、述語としては機能しない名詞がもう1つの名詞に後続する場合には、(40b) のような形式になる。「ので」が後続した場合には、(40c) のようになる。

- (40) a. ここにいる変わり者の集団
 b. ここにいる変わり者だけのの集団
 c. 変わり者だけなので...

(40a) の「変わり者」は、(39a) の「変わり者」と同じであるが、(40a) の「変わり者」の直後には「な」が現れない。この位置に「の」ではなく「な」が現れた場合には、(41) で示されているように、容認される形式とはならない。

- (41) *変わり者なだけの集まり

この事実は、名詞述語を形成するコンピュータは、活用する述語で終わらない場合に現れるデフォルトのコンピュータとは異なる統語位置を占めることを示している。そうすると、これまでの議論から、名詞述語を形成するコンピュータは形容動詞述語を形成するコンピュータと同じ分布を

示すことがわかる。そして、このことは、名詞述語や形容動詞述語と共起するコピュラが同じものであることを示唆し、さらに、名詞述語と形容動詞述語に同じコピュラが現れるのであれば、名詞と形容動詞の活用が、特別な規則が当てはまる連体形以外は同じになることを自然に捉えることができる。

5. まとめ

本稿では、形容動詞の形式は、名詞にコピュラが付いた形と同じであることから、形容動詞は、語幹にコピュラが伴う形式を持つことを論じた。コピュラが現れる名詞と形容動詞においては連体形（名詞修飾形）が異なる。これは、名詞には属格の助詞が現れるのに対して、形容動詞にはコピュラの連体形が現れるためであると分析することができることを示した。名詞と形容動詞の語幹にコピュラが現れるとする分析では、名詞と形容動詞の活用が連体形以外は同じとなることを自然に捉えることができるという理論的に望ましい帰結を得られる。

註

- ¹ 生成文法でのより近年での語彙範疇の取り扱いについては、例えば、Baker (2003)などを参照。
- ² 形容動詞に現れるコピュラは、文法化 (grammaticalization) が進んでいると見ることもできるであろう（文法化のさまざまな見方については、Brinton and Traugott (2005)を参照）。なお、形容動詞についてはさまざまな呼称がある。Matin (1978)では形容動詞はadjectival nounとして言及されている。本論では、伝統的な日本語文法の名称である形容動詞を用いる。
- ³ Higgins (1979)では、(5b)のような名詞述語文は、倒置指定文に分類されるが、Williams (1983)やMoro (1997)などで、倒置が起こっていることが示されている。したがって、本論では、(5b)の名詞述語文は、倒置が起こっていない指定文として言及する。この指定文と倒置指定文の分類は、西山 (2003)と基本的に同じになる。
- ⁴ 「だから」の中に含まれている「だ」はコピュラとして機能している。したがって、「だ」を「である」に置き換えることも可能である。
(i) 彼は{学生/穏やか}(である)のであるから...
ただし、コピュラが繰り返されると、余剰的な表現と感じられる。
- ⁵ 名詞述語は過去時制の形式で現れる場合もあるが、ここでの議論は、非過去の形式についてのみ検討する。

参考文献

- 奥津敬一郎. 1978. 『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』東京：くろしお出版。
信太知子. 1970. 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82, 29–41.

- 信太知子. 1976. 「準体助詞『の』の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連—」
立正女子大学国語研究室(編) 『立正女子大学国文』 5, 16–25.
- 時枝誠記. 1950. 『日本語文法 口語篇』 東京：岩波書店.
- 西山祐司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 東京：ひつじ書房.
- 橋本進吉. 1948. 『国語法研究』 東京：岩波書店.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法—改訂版—』 東京：くろしお出版.
- 村木新次郎. 2012. 『日本語の品詞体系とその周辺』 東京：ひつじ書房.
- Baker, Mark. 2003. *Lexical categories: Verbs, nouns, and adjectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brinton, Laurel, and Elizabeth Closs Traugott. 2005. *Lexicalization and language change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 1970. Remarks on nominalization. In Rodney A. Jacobs and Peter A. Rosenbaum (eds.) *Readings in English transformational grammar*. Waltham, Mass: Ginn. 184–221.
- Declark, Renaat. 1988. *Studies in copular sentences, clefts and pseudo-clefts*. Holland: Foris.
- Hasegawa, Yoko. 2015. *Japanese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Higgins, Roger. 1979. *The pseudo-cleft construction in English*. New York: Garland.
- Iwasaki, Shoichi. 2013. *Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kageyama, Taro. 1982. Word formation in Japanese. *Lingua* 57, 215–258.
- Martin, Samuel. 1975. *A reference grammar of Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. Lexical categories in Japanese. *Lingua* 73, 29–51.
- Moro, Andrea. 1977. *The raising of predicates: Predicative noun phrases and the theories of clause structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ohkado, Masayuki. 1991. On the status of adjectival nouns in Japanese. *Lingua* 83, 67–82.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Uehara, Satoshi. 1998. *Syntactic categories in Japanese: A cognitive and typological introduction*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Urushibara, Saeko. 1993. *Syntactic categories and extended projection in Japanese*. Doctoral dissertation, Brandeis University.
- Williams, Edwin. 1983. Semantic vs. syntactic categories. *Linguistics and Philosophy* 6, 423–466.